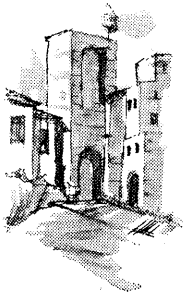
ヨーロッパの旅（九）

平井信義



人気（ひとけ）のほとんどないラムブイエの宮殿で、ひとときの静寂を味わってから、更に車を南へと走らせて、シャルトルという町にいく。この町にある寺院のステンドグラスが美しいということで、すでに午後の日射しが傾いてはいたが、一時間余りの行程を、この町までやってきたのであった。

寺院は、その正面が西日をいっぱいに受け、黄色味を帯びた輝きを見せながら、そそり立っていた。その前が広場になっており、何本かの木が植えられてあったが、一、二組の家族連れの男女がそこを横切っただけで、ここにもまた、静寂が漂っていた。

寺院の玄関に向かって左側のところに、着飾った老年の婦人が、台を前にして坐り、レースを編んでいる。頭にのせた白い帽子もそのレースで編んだものであり、黒い布地に白や赤のひだをつけたその部分も、レースであった。それはこの土地のコスチュームであり、人の目をひきつけるものがあった。商売が目的で、そうした衣裳を身につけて編みものをしているのであるが、その前に立つ人もなく、三人はおしゃべりをしながら、時々顔を見合わせては笑っていた。私がその光景を眺めているのを、ちらっとは見ることもあるが、私に誘いかけるでもなく、編みながらおしゃべりを楽しんでいるといった風情であり、やがて暮れかかる時を少しも惜しんではいない趣きがあった。

寺院に入る。西側の高みにあるステンドグラスは、まさに入陽を正面からうけて、赤に緑に黄色に、濃い陰影をつけて、絵柄を浮き出していた。それは、キリストにまつわる物語りを描いたものであるという。私はしばらくそれに見とれていた。やがて、それに背を向けて、祭壇の方をのぞむと、御堂の半ばから祭壇に近くまで、ステンドグラスを通してくる光が斜めに射しかけていたが、その光を避けるようにして祭壇にむけてひざまずき、お祈りを続けている六、七人の人たちがいた。私の方に背をむけている

ので、その年齢ははっきりわからないけれども、老いた人あり、若い人あり、男あり、女あり――という具合に、机の上に指を組んで、祈りの言葉をつぶやいていた。それはすでに長い間続いているのであろうか、私どもがその中にいるあいだも、同じ姿勢でみじろぎもしなかった。

寺院を出ると、裏手にある広場の木立ちの中へとまわっていった。そこは、寺院の蔭になって、すでにうす暗くなっていたが、東のはじに石垣が積まれ、その下はけわしい崖になっていた。目の下の谷間を越して目の前にひろがる丘には、白い壁の家並が段を作りながら、夕日をいっぱいに受けて並んでいた。一軒一軒が、緑も濃い木々の間から、手にとるように見えた。それらの家家は小じんまりとしたものであり、おそらくはあまりゆたかでない人々の住いのように思えた。

ヨーロッパに来てしばしば出会うのは、このような寺院とか宮殿のすぐ裏手に、スラム街があるということである。そこにある家々の壁はうすよごれていたり朽ちたりして、戸口も狭いものが多い。その中から、裸足のまま子どもが飛び出してくることもあり、戸口に坐って新聞紙につつんだどら焼のような菓子をなめるようにして食べていた子どもの姿をみたこともある。あるいは、小さい戸口のいくつも並んでる道の石畳の上で、かけごとをして遊んでいる子どもたちを見たこともある。その子どもたちの衣類はうすよごれたり、破けたりしていた。あるいは、家の近くの朽ちた壁に、いかがわしい絵が描いてあり、その下にいく筋かの小便の流れたあとがついていることもあった。

そのような光景を見るたびに、そしてそれを思い起こすたびに、どうしてこのような場所にスラム街ができるのであろうか、また、その福祉を向上させるために、どうしてもっと努力をしないのであろうかと、考えざるを得なかった。

しかし、このシャルトルの町並からは、その印象を受けなかった。それが、今でも、この寺院とその界隈を美しく思い出させてくれるゆえんかも知れない。

ふと見ると、崖の上に積まれた石垣のちょうど中頃に、若い男女が抱き合っている姿が目にとまった。その石垣には男が自分の背をもたせ、女の子の背をかかえ込むようにしていたが、女の子の方は背伸びをするような格好で、両腕を男の首にしっかりと巻きつけていた。男の口もとはおおいかぶさるように女の口もとをふさぎ、二人は身じろぎもしなかった。それはわれわれが石垣に近づき、しばらく町並を眺め下ろしたり、寺院の高みを梢の間から仰いだりしているあいだじゅう、そしてその広場から立ち去るまで、続いていた。それは、まさに一幅の画であった。

その晩、パリーの研究所ですでに十五年の研究生活を送っている地質学者と、留学が二年目になる物理学者夫妻と、コニャックの味を口にふくみながら、深更まで話し合った。

「いったい、どうしてあんなに人目のつくところで、男と女がい

ちゃついているのだろう」と、物理学者が言った。彼自身も激しい恋愛をへて結婚した人であった。「何か、人に見てもらわないと、損しているような気になっているのじゃないかしら？」

「日本でも、近頃は同じような現象にうつり変わってきているのではないですか？　全体がそのように変わってくると、それが当たり前になって、特別に意識しなくなることも考えられますね」と、地質学者が応じた。

「しかし、何もわざわざあんなところで抱き合わなくったって、もっと情緒的な場所があるでしょうにね。ぼくら東洋人には、少なくとも僕なんかには、まねのできないことだ」

「ぼくもパリーに来た頃にはそれが気になったものですが、今では全く特別な感じ方をしなくなりましたね。根本的に考えて、そのような行動の型が、人間としてどのような意味をもつのか、ぼくにはよくわからないことですが……」

「何か、動物的――っていう感じだな」

「それも、やはり感じ方のちがいがあるとも言えますよ」

少なくとも西洋の文化が入ってくるまでのわが国では、男女のつき合い方に「奥ゆかしい」ものがあり、それを尊んだ。思いを歌や詩に託して表現するという文化的な方法が用いられてもいた。それが、今や皮ふの感覚を通しての直接的な刺激を求める形で表現され、しかも人目をはばからない状態にまでなっている。文化が、そしてそれを支えている人間の精神構造が、次第に、皮ふ関係に頼るといった小児的な段階に退行しているのであろうか。今後において、わが国の男女関係の表現が、西欧化してしまうと共に幼稚化するのであろうか？　私自身はどうであろう？

「数年前、家内といっしょにヨーロッパで三カ月過ごした時に、いつの間にか、町を歩く時にはお互いに腕を組むようになっていたのですよ。それまでは、東京の町の中を二人で腕を組んで歩くようなことは、はずかしくてできなかった。しかし、こちらに来て、年をとった人たちまで、夫婦と限らず男女が歩いている時には、腕を組んでいる。そのような環境の中にいるうちに、腕を組んで歩かないことのほうが妙になってきたのです。腕を組まないと、何だか、けんかをして歩いているような気分になるのですね。変なものだなあ――」と私が言った。

「東京に帰ってから、腕を組んで歩いておられますか？」

「やはり、日中はどうも具合が悪いように思えてくるのです。家内の方が積極的で、腕をさし入れてくるのですが、ぼくは、何となく、くすぐったいような気がしてしまうのです。でも、夜など、人目につかないところでは、腕を組みますが……」

「まあ、おあついこと」と物理学者夫人がはじめて口をひらいたので、みんなが笑い出してしまった。

そこで話は別の方に向けられた。フランスの学者があまり勉強をせず、学閥と要領とに頼っている面があり、わが国の学者の勉強ぶりがいかにすぐれているか――ということを地質学者が言い

出した。

「それなのに、どうして、欧米の文献をあさってはそれを追っていくような学者の方が、日本では尊重されるのでしょうか？ユニークな研究をしている人でも、それが外国文で発表され、こちらの人の目にとまり、こちらの人が高く評価しはじめると、あわてて日本でも評価をし直すということがよくあるのは、本当に残念な気持がします」

「それは、欧米崇拝の思想がまだまだ強く残っており、島国の中で威張っている田舎者の気持でいるからじゃないかな」

「それもそうだけれど、本当にじっくりと一つのことに打ち込んでいる人がいないために、打ち込んでいる人のすぐれた研究の価値がよくわからない人が多いからだと思いますよ」

「一つのことに打ち込めないような学界のムードは感じますね」

「外国にきていると、世の中のわずらわしいことにタッチしないでもすむ点で、研究に打ち込める——ということをしみじみ思いますね」

「日本にいると、雑事に引っぱり出されることが多すぎますね。どうしてそういうことになるのだろう」

このような会話が、二人の学者の間で交わされているのをききながら、私自身、打ち込む余裕のなかった研究生活がしみじみ思い返された。

「ヴァカンスをたっぷりとるけれど、あれも、役に立っているのではないでしょうか？」

夏のバリーは、パリージェンヌがほとんどいなくなる季節であると、きいている。みんなが、それぞれ計画していた旅先へとでかけていくからである。

「ヴァカンスの送り方は、人によってそれぞれちがうだろうが、こちらのすぐれた学者は、思索の時に使っていますね。専門以外の本、特に文学書とか哲学書を読んでいる。この点も、日本の学者とちがう点じゃないかしら。日本のヴァカンスは少ないし、その間でも専門の本を読んだり、専門のことを書いたりしている。それだけ商売熱心ということになるでしょうが、思想のある学者にはなれないでしょうね。だから、話の中に味わいのある人が少ないと思うがどうでしょう」

このことは、私の留学中にもしばしば経験したことである。私の先生のベンホルト・トムセン教授もアスペルガー教授も、小児科医ではあるが、ヴァカンスには、分厚い哲学書とか小説、戯曲などを読んでおられた。そして、その内容についていろいろと私に話して下さった。

現在でもなお、年に一～二回、自分が読んで感激したという本を、送ってきてくださる。それらの多くが、大部のものである。私は、ある時には目次に目を通すだけに終わったり、読みかけて放棄してしまったりで、なかなか思うように完読できない。先生からの次の手紙には、感想はどうだったかなどと質問してくること

がしばしばであったが、多くは、まだ読み通していないから――といった情ない返事になってしまっている。留学当時を思い出してみて、私の二人の先生とのふだんの話の中でも、人生観にふれるような言葉がたびたび出てきて、心を打たれるのは、やはり長いヴァカンスをゆっくりと思索に費しておられることによるものにちがいない。わが国の小児科医からは汲み取ることのできないような風格があるのもそのためであろうか？

「しかし、若い連中には、そうした傾向が次第に少なくなって、目先の実利的な面だけを追究したり、遊んだ方が得だ――といった暮し方をしている者が多くなっていると思うが、どうだろう」と、物理学者。

「私の研究所でも、たしかにそのことで言えますが、終局的に言えば、人によりけりというところではないですか」と地質学者。

「あまり長くこちらで生活していますと、日本との比較ということができにくくなってしまいますね。特に、人間の問題となると、似たりよったりで、いい人もあれば悪い人もあり、すぐれた仕事を目立たないでしている人もあり、大した仕事をしてもいないのに威張っている人もあり――というふうに……」

十一階にあるその部屋は、天に高く突き出ている細長い建物であったが、闇につつまれ、周囲のもの音から隔絶されると、ちょうど一階の応接間にいるような感じがした。

「ちょっと、窓から外をみてごらんになりません？　ちょうど斜め左に、エッフェル塔の光がみえますわよ」と、夫人がいった。

私は、コニャックの香りと味とに、すでにほろ酔う状態のまま、窓をくぐり抜けてテラスに出た。真暗闇の中、そして目の前に、縦横無数の四角い窓が電灯の光に輝いている。ここは、パリーの南にあるパッシーという巨大な団地であり、古いパリーとは全く趣きを異にして、縦と横、あるいは斜めに、巨大な建物が続いていた。夜の窓の灯は、その家庭家庭を象徴するように輝いていて、そこに人影がみえなくとも、そこから家庭のふんい気が洩れてくるような感じさえする。私は、このような夜景をみるのが好きである。私をいたわるようにしてでてきた夫人が、

「ほら、あそこに点滅している光が、エッフェル塔ですのよ。ごらんになれるかしら、ほら、今、光った」

はじめの時は、その光が私の目には入ってこなかったが、「ほらまた光った」と、二度三度言われているうちに視点が定まり、ちらっと光る灯をとらえた。

「今、光った、あれでしょ」「そうです、そうです」

二人は、手すりに身を託しながら、しばらく夜風に吹かれていた。それは、音もなく頬をかすめて通り抜けていった。大きな闇、そして、窓をいろどる光、そして、遙か遠くに点滅しているエッフェル塔の光――それをじっと眺めているとうちに、ふと、やはり、自分は今、日本の裏側の地球にいるのだなあ――と思われてきた。